

六百番歌合の成立事情について

—— 建久四年内に成ったか ——

松 野 陽 一

建久四年左大将家百首歌合、通称六百番歌合は、千五百番歌合に次ぐ番数を持った大規模な歌合として、歌合史上は無論のこと歌論史的にも、又千載集撰集後の歌壇の情勢を窺う上でも見落すことのできない宝庫的存在なのであるが、その成立の事情については不明のままに残されている部分が多い。

そこで本稿では、この点に触れていられる諸先輩の御考察の不足をいささか補正しつつ、この歌合が企画されてから披露、評定そして加判されるに到る成立の過程を跡づけてみようと思っている。そしてその結果から六百番歌合の最後の完成の時期をもほぼ推定してみたいのであるが、結論を先に述べれば、この歌合の完成は、峯岸義秋博士の御推測^{註一}になる建久五年までは至らず、四年内のことではなかったのではないか、と思われるのである。

註一 同博士著「歌合の研究」二二四頁。

まずこの歌合が生まれてくる背景となったものから考えてゆこうと思う。

建久年間の京都政界で最も権勢のあったのは九条家の一門であった。寿永四年に平氏が壇浦に亡んで天下の実権が源氏の手中に帰すると、京都では親源氏派の九条兼実が摂政に任ぜられ、建久七年政敵源通親等の策謀によって失脚するまで、文治建久の約十年間を通じて最も栄えたのがこの一門なのであった。当主兼実は同時に非常な文芸愛好家であり保護者であって、当時の文人歌人の多くは彼がまだ政治的に脚光を浴びる治承以前からこの九条家に出入して一つの文芸サロンを形成していた。それらの歌人のうちでは姻戚関係であることも手伝って、早くから六条家系の歌人達が出入して兼実の知遇を得ていたのであるが、治承元年に六条家の総帥清輔が白玉楼中の人となった後、歌壇の最長老である釈阿俊成が代ってこのサロンの指導者格の人物として迎えられてからは御子左家系の歌人達も次第に頻繁に九条家での催事にも参加

するようになった。即ち九条家は、当時歌壇の二大歌門である六条家と御子左家の歌人を迎えてその場がそのまま歌壇の縮図であったといつても過言でない状態にあったのである。

さて、俊成の子定家も文治初年から家司として九条家に仕えるようになり、主に兼実の子良経に侍していたらしいが、歌道修業の面では良経の師乃至先輩であり、又文芸的な催事などの企画や実践の参謀として新しい歌風の開拓に努めていたようである。この間文治四年四月には千載集が選進奏覧されているが、建久に入ってから、恐らく兼実は政務に多忙であつたのであらうし、良経が丁度文芸に積極的に興味を持つ年令にまで成長したこともあつてゐる。そしてそれら歌会歌合等の催しや更に私的な歌作の機会は、単に文芸遊戲と云われてもやむを得ぬような性質を持つたものもあるが、多くの場合、もっと新しい文芸領域を開拓しようとする実験的な性格を持った歌道修業の場であつたと考えてよいと思う。これら実験的な意欲に満ちた催しを企画し推進してゐたのは、やはり若い良経と定家のコンビであり、それにやや年長ではあるが、歌壇的には同世代に属する良経の叔父慈円であつたのであらう。この六百番歌合もこうした一連の実験の一つとして企画されたものと考えてよいと思う。

註一 「月清集」「拾玉集」「拾遺愚草」等参照。

三

この歌合がそうした実験的性格を持つてゐることはその内容や構成から直ぐに感じとられ得るのであるが、その例の一端として「題」の内容に少々触れておこう。

六百番歌合は「百題百首歌合」であり、その題は前半の四季部五十題と後半の恋部五十題の二部から成る構成を持つてゐる。そして、四季部五十題のうち丁度半数に当る二十五題は左記の如く永久四年堀河次郎百首の歌題と共通であつて、相當に次郎百首の存在を強く意識した設題であると考えられる。つまり、

春部	余寒、賭射、雉、遊絲、春曙、志賀山越、蛙。
夏部	賀茂祭、夏草、扇、夏衣、蟬、鶉川、夕立 <small>（次郎百首では秋）</small> 。
秋部	残暑、九月九日、稻妻、鳶、杳。
冬部	爰、野行幸、落葉、椎柴、衾、仏名。

ここに見られる選題意識には、当時の歌人が先行する著名な百題百首歌の題によって作歌する場合と共通の意識があつたものとみてよからう。そして特に次郎百首を意識したといふことは、この歌合の企画の際に出題者が「百首歌」と「歌合」の結合を（後述する如き撰歌合を前提とした百首歌として企画されたとしても）企図して、性質の異なる「百首歌の歌」と「歌合の歌」を融合せようとしたことを示していよう。当時、歌作修業の手段として、もしくは遊戲的なものとして、必ずしも充分な完成度を必要としなかつた「百首歌の歌」に「歌合の歌」としての「晴れの歌」の性質を具備させる為に、「百首歌」としては公式の場のものであ

った「堀河次郎百首」から特に選題されたのであろう。

一方、恋部にも相当意欲的且つ意識的な配慮を知ることが出来る。大体、恋題が百題のうちの五割も占めるということは、峯岸博士も御指摘の如く空前のことであり、それがこの歌合の特徴となっているのであるが、単に多いというだけでなくそれが整然と分類し配列してあることに特色が認められよう。これは「題」についての各作者の得手不得手を考慮して公平を期した結果のことと考えられる。恋部は大別すると前後二十五題づつに等分することが出来、前半二十五題は「恋の状態」を分類してほぼ雑纂的に集めたもの、後半は「ある素材を設定し、その素材と結びつけた恋」が設題の内容であり、「寄物恋」型の組題となっている。そしてその素材は、五題ずつ「天象」「地儀」「禽虫」「資具」「人倫」に分類するという歌論的な体系を持った構成となっているが、これは建久二年に行われた「十題百首」の部類と共通した意識を示すものと考えることが出来る。あの博識の顯昭をして戸迷わしめた設題は^{註四}実にこの九条家サロンの新鋭歌人達が推進してきた文芸上の実験意欲(この場合では題詠の内容の分化と体系づけの問題)の所産であったのである。このように、ただ雑然と集めたのではなくきちんと分類し体系づけられた題が、題詠という共通の条件の下に各作者に実力を公平裡に競わしめる因となっていることは先述した通りである。

結局、六百番歌合は百首歌と歌合という二つのジャンルを「題詠」という共通の要素を媒体として結びつけてみようとする文芸上の興味から企画されたものと考えられる。

そして、嘗てなかったこの新しく大規模な企画を、後代の範ともなるべき歌合の一つの典型としようとするほどの意識が、題をかくも体系的なものとさせ、方人の選定に細心の注意を施し、歌壇最高權威の俊成を判者に迎えて、企画をこの上なく格の高いものとしようとさせたのであろう。

これら内容や構成については、主題を見失う恐れがあるので詳述は別稿に譲るが、ここで特にこの点に触れたのは、この歌合では「企画」というものが大きな意味を持っていると考えられるからに他ならない。六百番歌合における「企画」は「披講」「評定」「加判」と共に重視されるべきである。

註一 これは「組合せ」の点からも立証される。この歌合は「文芸性」に重点を置いた歌合であるから大部分は「乱合せ」であるが、四季部第一題と恋部第一題のみは「組合せ」「組合せ順」が同一で「身分」(権門・専門歌人・僧)によっていて、「晴れの場」の「社交的性格」を示しており、四季部と恋部とが対等関係にあることがわかる。

註二 同博士著「歌合の研究」

註三 「天部」「地部」「居所」「草」「木」「鳥」「獸」「虫」「神祇」「釈教」の十題に分れており、このような歌論的分類意識による題詠は、六百番歌合の設題意識と共通であって良経や定家の興味の方向を示しているよう。

註四 「顯昭陳状」(寄虫恋)

註五 十二人の方が、権門系(良経、慈円、家房、兼宗)、

専門歌人、六条系（季経、顯昭、経家、有家）、同じく御子左系（隆信、寂蓮、家隆、定家）と三分されて均衡がとられてゐる。

四

さて、こうした内容と構成とを持った歌合の企画は誰によってなされたのであろうか。これは従来指摘されてきた如く、拾遺愚草の「歌合百首 建久四年秋、三年給題云々」という記録によって出題者が良経であったと考えられるが、単に出題だけでなく、企画も殆んど彼によつたものと見てよからう。勿論、定家の協力と補佐とを充分考えぬわけにはゆかぬが、「給題」という詞からも、良経の主體的な働きかけがあったと見るべきである。従つて建久三年に良経によつて企画されたと考えられる。年も押つまつてからのことであつたらう。

ところで当初出題された時には、前節で見たような内容、つまり現在我々が見ている形での六百番歌合の内容とは異つた形のものであつたと考えられる注目すべき記載が顯昭陳状にある。それは（寄虫恋）の「此の御歌合本は、只百番とのみ承り侍りしかば云々。（中略）況んや百首の中には何事か侍らんとて詠じて加へて侍るなり」という箇所と、（寄鳥恋）の「此の歌合にて百番にて裏み入れて侍れば、もとより勝負をば執し侍らぬに云々。」の箇所であるが、前の文を前後の關係を補つて解釈してみると、顯昭は「この歌合は最初百番の撰歌合として開催すると聞いていた。だから、詠進するよう求められた百首の数だけは揃えたが、撰歌

合であるから全部が秀歌でなくともよいと思ひ、一応歌として体裁の整つてゐる歌なら、とこの歌を加えてしまつた」と言ひたかつたのであると思われ、この歌合の爲の良経からの出題は「百題百首歌合」の爲のものとは考えず、百首の中からの「撰百番歌合」を目的としたものと考えていたように受取れる。つまり建久元年に行われた「花月百首」と「花月撰歌合」の場合に於けるような關係を顯昭は考えていたのであろう。この条は、強氣の顯昭にしては珍らしく自歌の非を認め、妙に弁解がましい文章となつていて、それだけに存外正しい事情を伝へてゐるものと考えられる。後の例もそれを裏付けてゐるのであつて、これは単に顯昭が出題者の意圖を誤つて受取つてゐたのではないであらう。

しかしながら、最初の企画が現在の形と異つて「百題百首の歌合」ではなく、「百題百首」からの「撰百番歌合」であつたにしろ、「百題百首」はあくまで「歌合」を前提として出題されたものには変りはない。そしてその百題が良経によつて選題され、出題されたのである。

もし方人の位階が百首の歌を提出した時のものであるとすれば、少なくとも家隆は正月二十九日以前に歌を詠進したことになるし他の歌人にも出題からさほどの日の経ない中に詠んだ人のいる可能性もあるが、恐らく大半は年を越して春も深くなつてからの詠進であつたらう。正月は何かと宮中に儀式や行事の多い時ではあるし、平和の回復に伴ひ旧儀の復活は非常に盛んであつたから、貴族たるものなかなか歌を詠む暇もなかつたであらう。とりわけ重要なことは良経の片腕定家の詠進が遅れたことである。先

に引いた拾遺愚草の記録の「三年給題」に続く「今年雖憚身、依別儀猶被召此歌」はその遅延の事情を示すもので、此の年二月十三日に母の加賀が亡くなった為に、喪中で定家が歌を作れなかったことを意味している。

百首の歌を「晴れの歌」にふさわしいものとする為に各人が苦心の彫琢を施す時間は相当掛かったと見られるが、大事なところで、企画者良経にとって最大の協力者である定家が、この企ての場から離れてしまつたわけである。

拾遺愚草所載の定家母の死を悼んだ各人との贈答歌の詞書は、^{註二}後年愚草編纂の折にまとめて記された事情もあるが、彼の悲嘆が実に強く出ていて、秋に至ってもまだ悲しみは一層つのる程であった。このような状態ではとても晴れの場である歌合に参加する気持にはなれなかったであろう。しかし、良経の方もこの魅力に富んだ企画を捨て切れなかった。「今年雖憚身、依別儀猶被召此歌」とあるのはその事情を指しているので、母の死という不幸の中にある定家を、無理を承知で促し、遂にこれに参加せしめたものと思われる。先に述べたような企画の変更にこの間になされ、現在の形の如き空前の規模の催しを主宰する魅力が良経を駆立て定家の気持を押切ったのであろう。

又、この二人にとって歌道修業上最も親しかった慈円も建久三年末から四年の夏にかけては多忙を極めていた。即ち三年の十一月廿九日に権僧正に任ぜられ、即日天台座主並びに後鳥羽天皇の護持僧に補されて登載し、年が明けてからも宮中の御修法等で内裏に参上するほかは山務に励んでいたようである。それ故、良経

はこの叔父慈円からも身近に力を添えて貰うことは出来なかったと思われる。

右の如き事情で企画はなかなかどらなかつたのであるが、やうと秋に入ってから、披露するまでに漕ぎつけられたのであつた。

註一 久曾神昇氏著「顕昭寂蓮」二三七頁。但、この位階を方人を定めた時のもの、もしくは出題して百首の詠進を求めた時のものと考えれば、愚草の「三年給題」は三年十月二十六日以降大晦日の間のこととなる。

註二 如月、大輔。三月尽日、後京極大將殿(良経)。五月、三位季経。七月九日、父俊成とそれぞれ贈答歌を交している。

△拾遺愚草、長秋草▽
隆信朝臣集にも贈答歌が見える。加賀は隆信の母でもある。

五

披露以後の過程については、「歌合の研究」に於て峯岸博士が「井蛙抄」の一節から抽象されて

① 披露が連日続いて長期に涉っている。

② 方人はかならずしも全員毎日出席していない。まして判者は出席不明である。

③ 評定の結果がその都度記録されている。等を上げて推測せられ、更に

④ 建久四年秋に始まり（拾遺愚草の記録による）最後の完成は建久五年（圖書寮藏親長本の標題下に建久五年と記されている事実と対照して推察）になったのではないか。^{註一}

⑤ 俊成の批評は評定の記録に基いておこなわれた。他の歌合の例に照して、^{註二}判者はたまたま出席しても当座では勝負の記のみ註付して判詞は後日にした。

と補足せられていて、（但、簡条分けは筆者）ほぼこの歌合の次第を明らかにしている如くに見えるが、卑見によれば更に補足すべき点が考えられ、それが成立の時期の点にも関係してくるように思えるので、以下にそれを陳べてみたい。

披講が連日続いて長期に涉っている、という事情は、六百番という番数からみても短時日で披講し得るはずもなく、ほぼ妥当な考え方であるが、然らばそれはどのような形で行われ、どれ程の期間に涉っているであろうか。

この点については、久曾神氏が治承二年に兼実の主催した百首歌の披講の例を引いていられるが、^{註三}この例は大いに参考になると思う。この時の百首歌は十首ずつ十回に分けて三月廿日から六月底日まで、十日おきに一日ずつ披講された。

ところで六百番歌合の方は「歌合」であるし、「評定」（難陳）との関係もあってこの例のように日時時点で整然と十日おき、という具合にはゆかなかったかもしれないが、百題の構成が五題ずつ一まとめになっている点から考えると分量的には区切りよく分割されて、右の例の如くまとめて披講され得た可能性がある。

これは判詞や陳状の内容からも推察されるのであるが、全体が幾つかに区分され、その一区切の部分の組合された番はまとめて披講され、次いでその一区切の番が順次評定されて、評定はその都度に記録され、それが判者の許に順次送られて加判される一方、次の新しい一区切の披講が行われる、という形で進行したものと思われる。加判については後述するが、次に上げる一連の顯昭陳状の内容は、かなりよくその間の事情を伝えているように思われる。

歌の組合せの全体が幾つかに区切られてその一区切がまとめて披講され、その披講された組合せの歌について順次評定（難陳）が為されたという事情は、陳状の「寄鳥恋」に、顯昭はかねてから万葉集中の「山鳥のをろのはつをに鏡かけ」という歌、「鵲の草茎見えずとも」という歌、「鬼志古草名にこそ有りけれ」という歌の三首については彼独得の見解を持ち、非常な関心を寄せていたところ、^{註四}

此両首しも被番て侍る面白く侍るを、此の番評定の時しも不参し侍りしかば

この自歌についてどのような沙汰があったのか、又相手の歌の「鵲の草茎」がどのような根拠によって詠み込まれたのかを質することが出来ず残念だった、という記事から推察されるように、歌の組合せが評定をされる以前何日か前に判明して居り、その時が披講された時と考えられるから、一番ずつ披講について評定されるという繰り返しではなく、何番かまとめて披講されていたことも推察されるのである。これは又、歌合の評定の記録からも裏付け

られるように思う。例えば（秋中2秋雨）の右歌

日にそへて秋の涼しさ伝ふなり

時雨はまたし夕暮の雨

左申云、または未か不待か、不審。

陳云、未なり。

又難云、然らば未詞聞きよからず。

という評定がある。ここでは「またし」という詞の濁点の位置が問題となっているわけであるが、その原因には幾つかのケエスが考えられる。第一に、評定の際に講師の朗誦によって歌が披露されたものと考えられる場合には、朗誦が清音によって「またし」と発音された為に、方人には「未」か「不待」かはっきりしなかったのだと考えることができる。これは他の例では、一首の中に懸詞の用いてある歌の場合などには同様なケエスの起り得る可能性がある。（濁音の誤読の可能性はまずない。何故なら講師が誤読すれば、左方の難する以前に作者が訂正するだろうから。）第二には、評定に際して方人が書面によって歌を享受したからこうした問題が生じたのだと考えられる。つまり、当時の表記法では通常濁点は附さないから、左方人は「またし」の濁点の位置を右方に糺したのだと思われるわけである。以上二つのケエスはいずれも可能性の考えられることであるが、朗誦がはたして清音によったか否かは断定し得ないのだし、元永元年内大臣家歌合で「たつ」を「たづ」と誤認して恥をかいだ基俊の例も同様と思われるが、濁点の打っていない表記から生じた問題と考えておく。六百番歌合では何番か歌がまとめて披露され、それが紙上に記録されたもの

に基いて方人が評定を加えたのだと考えたい。この（秋中2番秋雨）^{つゆ}番は、この歌合の披露と評定の様式を示している例として指摘しておこう。

次に評定であるが、例の井蛙抄の記述の如く激しい論争の場が展開されたことは、「蛙」並びに「寄煙恋」の「かひや」論争や、「夏夜」の陳状を見れば如実に知られるのであるが、成立過程を問題とする上で注目を引くのは、かくも激烈な論争が展開された評定が正確に記録をされていなかった為に、その記録に基いて為された判が正しく下されていないことに対して、願昭が大いに不満の意を表している箇所が陳状には随所に見られる、という点である。これは「元日宴」「若草」「夏夜」「九月九日」「寄煙恋」「寄河恋」「寄虫恋」「寄絵恋」「寄海人恋」の各項に見られるのであるが、現存の陳状は恋部の一から五までを欠いているのであるから、ほぼ全体に関して彼がこの点について不満と批判を示していると見てよい。つまり、俊成は恐らくほとんど出席することなく、（不正確なもしくは不十分な）記録に基いて判を加えたのである。

これは又、判者自身の記した判詞によっても裏付けられそうである。一二の例を拾うと

（恋二14・待恋）

右方申云、左歌、還て様あるか。

判云、右方人かへりてやうあるかといへる、如何に申すにか。待つの字あらはなる由にや。

(冬上3・落葉)

右申云、左歌、心ゆかず聞ゆ。

判云、左歌、心あるやうに侍れど、右方心ゆかずとし、し、申して侍り。

等の例があるが、前者は記録が簡単すぎて判者が文意を汲みとりにかねていることを示すものと思われるし、又後者は明らかに「しるし申して侍り」と記されているから、共に判者がその評定の場に居ないで、記録によって判じたことを示していると考えられる。

後日判であることについては傍証となる例は他にも多いが、もし当座判であつて評定の都度に加判されたものであるとするなら、これ程の評定のあつた歌合では、当然、前に為された判の内容が、後の判の内容や評定に影響があるはずであつて、特に同じ詞の用いてある時などは問題となるはずであるが、例の「かひや」論争でも、「蛙」で為された判での俊成の説は「寄煙窓」の評定では一向に利用されていないし、しかも俊成自身が「寄煙窓」の判詞の中で云っている所の、「蛙」判詞中の俊成説と「寄煙窓」難陳中の方人説の一致、ということは、顯昭陳状で完膚なきまでに叩かれてゐる如く、矛盾があつて事実ではないのである。判者对方人の応酬の機会がなかったからこそ後日、陳状が顯昭によって著されたのであらう。

ところで、判は右に見てきたように確かに後日判であつたのであるが、区切られた歌の組合の披講と評定が全て終つてしまつてから全部がまとめられて俊成の許に送られたのではなく、従つて、俊成は筆を執つてゝ氣に一貫して初めから終りまで判を加えたの

ではなく、一区切りの披講と評定が済んだ歌の組合せが送られてくる度毎に筆を執つたものと考えられる。

これは、先に引いた「かひや」の問題にしても(元日宴)と(三月三日)にみられる「まどゐ」の秀句の問題にしても、同じ問題を違つた箇所であつた場合の一貫性に、俊成らしい綿密な配慮が必ずしも払われていない、という点から考えられることなのであるが、峯岸博士が「たまたま(判者が)出席しても当座では勝負の記のみ註付して判詞は後日にしるした」と推定された根拠にあげていられる治承三年十月十八日右大臣家歌合に関する玉葉の記事は、やはり卑見の根拠ともなるものなのである。即ち玉葉には、

(前略)今夜不付勝負 明日遣俊成入道之許、可令判也、依為桑門不座列 又依判者不接座 其儀密々也云々。

とあるのであるが、六百番歌合でも披講された一区切りの歌の組合せが、評定されて、そしてその場では勝負が付されずに、判者の許に送られ加判される、という形が何度か繰り返されて進行したのではないだろうか。そして披講評定の進捗とは密接な関係を持たずに加判されたので(つまり披講と評定は判の進捗とは関係なく進行した)方人達は判詞の内容を知ることがなかったのだ、と考えられる。

註一 峯岸博士の「始まり」は披講の開始を以て「始まり」

とし、「最後の完成」とは加判の終了清書を以てそれに當ててゐるようであるが、「企画」を以て「始まり」と

するのが妥当であらう。

註二 治承三年十月十八日右大臣家歌合。

註三 同氏著「顯昭寂蓮」二三七頁。

註四 万葉集の「山鳥のをろのはつをに鏡かけ」を引いた顯昭

の歌と「鵲の草茎」を詠み込んだ隆信の歌。六百番歌合、

恋八、十七番参照。

註五 この他に（恋五、廿六番）（恋五、三十番）等も例としてあげられる。

六

さて、右の如き過程で成立したと思われる六百番歌合は何時頃までに披講評定がなされ、加判は何時頃までであったろうか。果して峯岸博士の御推測の如く建久五年迄完成しなかったであろうか。

方人の一人であった慈門の家集拾玉集を見ると、建久四年の九月十三夜に良経と交した贈答歌五首があり、歌の内容から慈門はこの時叡山にいた事がわかり、同じ秋の暮にやはり山に居て定家と贈答している。この時の歌は定家の拾遺愚草によると「三位の中将（公衡。筆者註）なくなりての秋母のおもひにてこもりぬたる九月尽日山座主にたてまつる」という詞書が付いているので、定家も山にこもってしまっていたことがわかる。定家は同日に女院の大輔と贈答して居り、次いで「おなじ年の雪のあした後京極大将殿より」という詞書のある五首を贈答しているが、これは拾玉集の「建久四年十月八日朝初雪のことに降りたりしに日吉の行

辛近かるべきにてありしに左大将殿より」という良経と慈門が交した贈答の時期と同じ頃と考えられ、慈門と定家の二人は九月半ば頃からは左大将家を訪れていない可能性が強い。又、最後に引いた贈答歌の内容から推察されるように良経は、十一月十一日に行われた後鳥羽天皇の日吉社への行幸に供奉するについて一ヵ月以上も前から心を配って居り、その準備が相当忙しかったように推察される。

さて、披講と評定の方にかえて、もしそれが連日催されたとしても山務のある慈門はそう頻々山を離れるわけにもゆかなかつたろうから、九月のなかばに山にいたことが事実でもこれを以って披講と評定の進度と関係づけて考えることは出来ない。しかし定家の場合は母や従兄達の死で身を憚る時ではあっても歌を詠進したことはあるし、必ずしも出席する日は多くなかったとしても自分の主人が特に力を入れている催事をよそに山に籠ってしまふわけにはゆくまい。披講や評定が済んでやっと勤から解放されて山に入ったのが九月の末であったのだらう。それ故、六百番歌合の披講と評定は九月の末頃までには終わっていたものと推定する。

そして先に述べた披講と評定の一区切りが現存の形の一部ずつ（春上部とか、恋五部とかという一部）であったと仮定すると五題ずつが一区切りとなり、これは三十番六十首であるから一日分の披講の量としては従来の歌合と比較しても無理ではなく、評定に三乃至四日平均かかるとして、六十乃至八十日で全部が終る計算になるから秋のうちに終了したと見ても決しておかしくはな

い。無論八十日間連日欠かさず催されることもなかったろうが、右の計算は常識的にみて相当ゆとりのあるものだから、一区分が更に多量のものであったかもしれぬし、分量に多少の出入りはあったとしても無理な推測ではない。

かくして披講と評定が秋のうちに終了したものとすれば、加判も披講と評定の始まりからさほど日を経ずして始められたのであるから加判の註も年を越さずして為し得たのではなからうか。

陳状の（元日宴）の条を見ても判の結果の發表を待ちかねていた語調があるし、陳状巻末の「今度の御歌合、番数といひ評定と申し、懇なる御もてなし、ふるき跡にも過ぎて云々」という感懐からは評定終了後それ程日の経てないものが感じられる。更に歌合巻尾に付された判者の歌

住吉の松はあはれもかけやせむ八十過ぎぬる和歌の浦波

の「八十過ぎぬる」は、この建久四年が判者の丁度八十歳の年であったことを顧慮して、概数として考えてよいかと思う。

これらの諸点から六百番歌合は建久四年内に成ったと推定してはば誤りではないと思う。

以上に述べてきた成立の過程を整理すると次の如くなる。

- ① 六百番歌合は建久三年に良経により企画され、出題（十月二十六日以降か）された。
- ② 当初は撰百番歌合の素材として百首の詠進が求められたらしいが、途中から百題百首の特色を生かし歌合の機能と結合させた現在の形に変えられた。
- ③ 披講は定家の不幸などがあって遅延し秋から始められた。
- ④ 全体は幾つかに区分され、その一区分ずつまとめて披講されて（紙上に記録され）、それに評定が順次加えられるという形で進行していった。
- ⑤ 評定はその都度記録せられ、右の一区分ずつ判者の許に送られて、その記録に基いて加判された。
- ⑥ 判は披講と評定の開始後間もなく、その進度とは密接の關係なく始められ、進出した。
- ⑦ 披講と評定は九月末日近くには終了している。
- ⑧ 判の註もその後間もなくのことで、年を越してからの完成ではない。

八五月廿日稿了V